

田舎暮らしを楽しむ

(17)

佐藤 彰啓



自らの手で再生した古民家でくつろぐ淡路さん夫妻

「田舎暮らしの家は、黒光りする大黒柱のある古い民家がいい」。東京都府中市の淡路栄さん(65)は五年前、定年を控えて山梨県山梨市に築百数十年の農家の空き家を買った。

今、古い民家への人気が高まっている。過疎化する農山村で農家の空き家が増えている。こうした民家を都会の人が再生することはいへん意義のあることだ。農山村の景観を守り、地域の活性化にもつながる。

古民家探しはまず、農家の空き家情報で物件を現地

古民家選びは「屋根・土台」

家の手当て(5)

見学すること。管理された民家もあるが、廃屋同然のものも多い。ほとんどの人が「とてもこれでは…」と逃げ帰ってくる。なにしろ長年使われていなかった空き家である。淡路さんが求めた家も二十年間空き家で、壁は落ち床は抜け、私物が氾濫して足の踏み場もない。台所や風呂、便所も使えそうになかった。

しかし、こうした民家も実に見事によみがえるのである。古民家のよさは、大黒柱や梁(はり)の美

しきにある。建物内部の汚さや雑物に目を奪われないことだ。雑物は撤去すればいいし、ほこりを被った柱も磨けば黒光りする。外観はみすばらしく見えても、太い柱や梁で頑丈にできている民家が多い。

古い建物は、「まず、屋根と土台を見ろ」である。雨漏りがあれば、内部にかなり影響を与えている場合がある。土台は腐り具合やシロアリ被害の有無を調べる。屋根や土台がしっかりしていれば、内部をリフォームするだけで十分だ。

淡路さんは、定年を機に自らリフォームにとりかかった。土間だった台所に床を張り流し台を設けた。難しいところは大工の指導を仰ぎ、トイレも自分で作った。見よう見まねで壁も塗った。近くの製材所で材料を安く分けてもらい、かかった費用はわずか三百五十万円。これまで犬小屋しか作ったことがなかったが、妻と二人、三年がかりで見事によみがえらせた。

定年後、たっぷりある時間を使って、自ら民家を再生することも、一つの田舎暮らしの楽しみ方である。(ふるさと情報館代表)